

第103回フォト句優秀作品（20年2月9日）



冬の日の名残りの赤や苑歩く（晃二）



雛屋に亡き児尋ねて五十年(和彦)



裾乱し

巫女まで走る

年の暮(昌康)



白粉に紅差す花や
春を待つ（進一郎）



夜間飛行
目覚める頃は
異国の地（進一郎）

寸 評：

1) 歪みたる世こそ兜太忌石牟礼忌 大越 浩平

写真自体がこの世離れして美しくまた珍しい出来栄えだ。二月は金子兜太と石牟礼道子の没月だ。忌日は季語にとって代わるが、季語が二つもある季重なりの句である。画像を見ていると、難解な句だが作者の言いたいことは何となく伝わっている。

2) 冬の日の名残りの赤や苑歩く 安藤 晃二

非常にシャープな美しい画像だ。アカシアのの**名残りの赤**のフレーズが効いている。ただ下5のフレーズがやや説明的で惜しい感じがする。

3) 雛屋に亡き児尋ねて五十年 大月 和彦

雛人形を売る店を雛屋（ひいなや）という。吊るし雛が多すぎて画面がゴチャゴチャしているが新花巻の駅舎に飾ってあった風景という。

4) 裾乱し巫女まで走る年の暮れ 松田 昌康

年の暮れに忙しそうに走り廻っている巫女を巧みにとらえたカメラワークがスピード感を出し、臨場感があふれている。

5) 白粉に紅差す花や春を待つ 長尾 進一郎

白粉になぞらえた薄く積もった初雪の中の紅一点を愛でて撮ったもの。句がなければ見逃すような可愛い健気な花ではある。

6) 夜間飛行目覚める頃は異国の地

長尾 進一郎

人工衛星から見たアジアの俯瞰図のような画面に航空機の軌跡が描かれている珍しい画像だ。東京からドバイまでの機内での表示板を撮ったもの。句も長旅の一節を切り取った簡潔な表現で好感が持てる。



寸評：今月は下村さんの出題で明治神宮で開催された流鏝馬の写真。

1) 観客は昔拍手で今スマホ

下山 健二

確かにスマホを掲げている観客は多い。この句は汎用性があり、いろいろな場面に使える。

2) ここ一番外せば俺が矢面だ 長尾 進一郎

騎手であり射手の心境を綴ったもの。矢面という流鏝馬の関連語を用いたセンスを評価したい。

3) 武田菱若宮大路しらす井 大越 浩平

鎌倉八幡宮での流鏝馬を想定し関連語を並べた句である。下5にしらす井をあげた季節感覚が微笑ましい。

4) この種目東京五輪に採用だ 長尾 進一郎

今年開催されるオリンピックを連想したもの。コロナウイルスという厄介な問題が想起されているが、国家の総力を挙げてこの問題を克服して欲しいものである。

以 上